

## 第5回 湘南地方サナトリウム旧跡訪問

結核予防会 顧問 島尾 忠男  
結核予防会 総務部長 竹下 隆夫

### サナトリウム療法の背景

本シリーズの第1回(複十字第330号)で、結核研究所のある東京都清瀬市を結核関係者の聖地として紹介したが、今回は結核サナトリウムの歴史から見れば、清瀬のはるか先輩である神奈川県湘南地方のサナトリウムの旧跡を訪れた。治療法が今のように発達していない時代に、サナトリウム療法が成立したのは、人と結核菌との力関係に、微妙なバランスが成立していたからである。治療法が進歩する以前のがんのように、一方的にがん細胞のほうが強い場合には、誰もサナトリウム療法などは考えないであろう。薬のない時代の結核は、不治の病であり、死の病であった。しかし、有名なインドでの、結核菌が痰にでている肺結核患者の経過を治療なしで観察した成績が示すように、5年後に半数は死亡していたが、3割は菌が陰性化し、自然に治っている者もみられた。人体に備わっている結核菌に抵抗する力を強めて、何とか結核菌に勝とうという試みが行われてきた。長年の欧州諸国での経験から生み出されたのが、空気のきれいなところで、栄養のある食事をとり、安静を守るという方法で、これを行う施設として作られたのがサナトリウムである。

日本が長年の鎖国を止め、開国して国の近代化を進めた明治時代には、工業の発展と共に結核も蔓延し始めていた。富国強兵政策を進める中で、実際には西南の役、日清戦争、更に日露戦争と、当時の国力を超える戦争を続けて経験したため、軍事費に予算が割かれ、民生が圧迫された中で、結核はあらゆる階層に強く蔓延していった。有効な治療法がない当時、唯一可能であったのは、欧州で唱道されていたサナトリウム療法であった。そして、その建設地として推奨されたのが気候温暖で、東海道線、横須賀線が開通し、東京から便利に往来できるようになった湘南地方であった。

### 結核病床の医療機関の中での格

最近の結核病床を持つ医療機関の中で、結核病床の扱われ方を見ると、一番古い病舎が結核病床に使用されていることが多い。結核医療が典型的な不採算医療であるためである。しかし、湘南地方

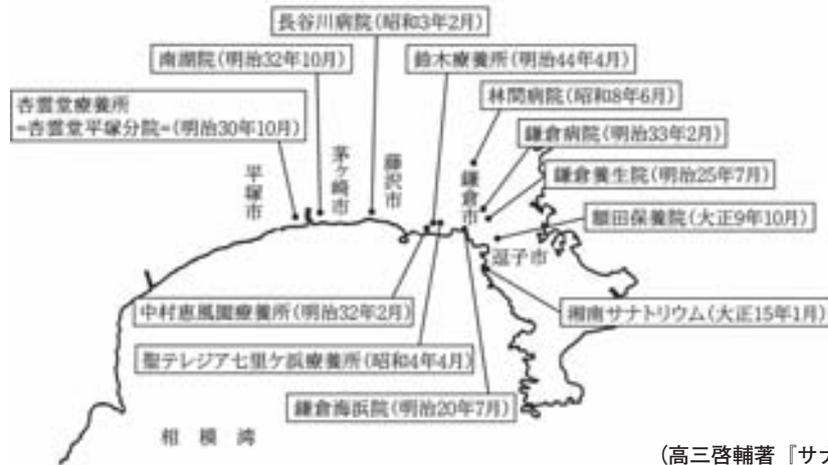
に多くのサナトリウムが建設された明治時代は、様相が全く違っていた。明治20年7月、湘南地方に最初に建設された鎌倉海浜院は、翌年にはホテルに転身していた。スイスのダボスにあるサナトリウムも同様で、化学療法の発達で需要が減少すると、その多くがホテルに転身している。建物自体がそのように立派に作られていたということである。その後湘南地方には明治25年に鎌倉養生院、明治30年に杏雲堂平塚分院、明治32年に中村恵風園療養所と南湖院が次々と開設され、最も多い時代には12のサナトリウムが湘南地方にあった。

この中で、南湖院は最初は5千坪強の土地から発足し、最後には5万坪の土地に総病床数200床強の施設に発展し、東京の医科大学の学生が施設見学にくるなど、診療の他に医学教育にも貢献している施設であった。しかし、入院料は昭和14年に一番安い病床でも1日3円であり、1カ月入院すると100円弱かかり、大學出の初任給が100円くらいであったことを考えると、庶民には長く入院することは困難であったと思われる。杏雲堂、南湖院とも本院は東京市内にあり、院長は双方兼務で往復をしておられたので、東海道線は開通していたとはいえ、今ほど道路事情や自動車も便利でない時代に、さぞ大変だったろうというのが現地を訪れた実感であった。湘南地方では、清瀬で見られたような、地元の土地取得に対する反対運動もなかったようで、明治のこの頃には、結核に対する差別、偏見はなかったのだろうか。(島尾記)



① 明治26年頃の鎌倉海浜院

湘南海岸のサナトリウム概略図 (数字は開設年月、名称は設立当時)



(高三啓輔著『サナトリウム残影』より)



② 明治32年に設立された南湖院の第一病舎



③ 南湖院の「戸外静臥」風景 (大気横臥所)



④ 現太陽の郷の庭にある南湖院を創設した高田畊安の碑



⑤ 現太陽の郷の門柱の裏側 (かつての南湖院の門柱が向きを変えて使われていた)



⑥ 長谷川病院 (現湘南ホスピタル) にて



⑦ 鈴木療養所 (現鈴木病院) にて

**当時、湘南海岸は「最高で最後の希望の地」**

島尾先生が既述しているように、わが国におけるサナトリウム(結核療養所)の誕生地は湘南海岸で、明治20年から昭和初期にかけて最も多い時で12の施設が存在した。この湘南海岸とともに、わが国のいわば空気の良い“サナトリウム銀座”はこの連載の第1回に記した清瀬で、昭和6年以来最も多い時で15の施設が存在していた。

高三啓輔著『サナトリウム残影』では、わが国のサナトリウムの歴史は大正6年を境にして前期と後期に分けられるとし、湘南海岸をはじめ兵庫・須磨海岸、長野・富士見高原に相次いで設立された明治20年から大正5年までの29年間を前期としている。この時期を前期とした理由は、これらのサナトリウムがすべて私設のものであったため、既述のように一般庶民には手が届きにくい入院料であったが、わが国における本格的な結核治療の嚆矢であった。

肺結核の弟の死に至るまでを描いた小説『おとうと』の中で、作家幸田文は「結核は俗に金食い病と云われるくらいです」とうめくように姉に言わせているが、実際、費用面からいって入所できる人は限られていたに違いない。とはいえ、当時の結核患者にとって湘南海岸のサナトリウムは、最高で最後の希望の地とされていたのも事実である。

こうした中で、サナトリウムでの療養を国民一般にも広めていく動きは大正6年に始まる。わが国初の公立結核療養所は大阪で開設された。市立刀根山療養所がそれである。以降、東京、京都、神戸、横浜、名古屋、長崎、新潟、函館、福島などに相次いで公立療養所が設立されていく。高三氏はこれをサナトリウムの歴史の後期としている。

ともあれ、今回旧跡を訪ねたのは茅ヶ崎市の南湖院(現老人ホーム・太陽の郷)、藤沢市の長谷川病院(現

湘南ホスピタル)、鎌倉市の鈴木療養所(現鈴木病院)、聖テレジア七里ヶ浜療養所(現聖テレジア病院)、中村恵風園療養所(現恵風園胃腸病院)であるが、残念ながら最も早く設立された鎌倉海浜院の跡地にはたどり着くことができなかった。

長谷川病院を除けば、これらの療養所はすべて海に面した景勝の地に設立されていた。南湖院は海岸の松林の奥に建てられたものと思われ、鈴木療養所、聖テレジア七里ヶ浜療養所、中村恵風園療養所は海岸に面した高台に建てられており、いずれも病室に海からの風を通して療養していたものと思われる。写真に掲げた「戸外静臥」は、昭和10年に発行された南湖院の絵はがきに印刷された写真であるが、恐らくは初夏から秋にかけてのいかにも長閑な風物詩と言えよう。

では湘南の地にサナトリウムの建設を促したのは誰か。最も強い影響を及ぼしたと言われているのはドイツ人医師エルウィン・ベルツである。彼は明治9年に東京医学校(現在の東京大学医学部)の教師として招かれ、明治39年まで滞在した。日本にスイスのダボスのような高原療養所がまだない状況下で、彼は理想とする「空気清々ノ地」を湘南海岸に求めた。実際、12のサナトリウムのうち9施設の創立者は東京医学校出身者で、その多くが彼の教えを受けたといい、南湖院を創設した高田畊安も帝国大学付属第一病院にいた時、ベルツの医局員の一人であった。

そして、もう一つのエピソードは、結核菌を発見したコッホが来日した際(明治41年7月)、1ヶ月以上を鎌倉海浜院から転身した海浜院ホテルで過ごしていることである。湘南海岸のサナトリウムをめぐる物語はまだまだ数多くあるが、いずれ稿を改めることとしたい。(竹下記)



**結核研究所  
国際セミナー予告**

**国際結核セミナー・全国結核対策推進会議  
世界結核デー記念フォーラム**

会場：ヤクルトホール(東京都港区東新橋1-1-19 JR新橋駅より徒歩5分)

主催：公益財団法人結核予防会結核研究所

- 第16回 国際結核セミナー  
“感染リスクへのアプローチ”  
日時：平成23年3月3日(木) 13:00~17:10
- 世界結核デー記念フォーラム  
“青木先生記念フォーラム「研究の成果を活かした新しい対策の樹立—接触者健診の礎」”  
日時：平成23年3月3日(木) 17:30~19:30  
\*国際結核セミナーに引き続き行います。

- 平成22年度全国結核対策推進会議  
“結核対策の新機軸”  
日時：平成23年3月4日(金) 9:00~15:30  
\*ポスターによる活動報告(DOTSや地域連携などその他含む)を募集いたします。(10題、締め切り2月14日(月))  
\*申込み方法等(ポスター展示申込みを含む)、詳細につきましては近日中に結核研究所ホームページ上に掲載いたします)